

【書評・紹介】

加藤 正春 著 『奄美沖繩の火葬と葬墓制 変容と持続』

(沖繩, 榕樹書林, 2010年4月, A5判, 337頁, 5600円+税)

林美枝子

著者は長年奄美沖繩の研究に携わってきた民俗学者であり、文化人類学者であるが、本書は2001年から2007年にかけて執筆された当該地域の火葬と葬墓制に関する研究論文8本に加筆、修正したものと、本土他府県の葬墓制との比較を試みた附論が収められている。

著者は、金城朝永が述べた琉球文化を大和文化の従属的立場から解放し一つの独立した単位として扱うという提言の有効性を実証しつつ、先人に倣って「その構造と体型を内側から論ずる」(本書: 3) ことを奄美沖繩研究の手法としてきたという。金城の提言は1950年の『民族学研究』編集後記に書かれた一文であるが、そこには沖繩の民俗に関して「今日までの資料を整理した土台を跳躍版として、今後進むべき大体の方針を定める時期にきている」(金城 1950b: 234) という編集意図が示されている。金城自身による巻頭論文では、沖繩戦により

「古文献一切を悉く烏有に帰してしまった」ことを嘆き、新たな沖繩研究の段階をこの一冊から迎えようとする意欲が伝わってくる(金城 1950a: 100)。『民族学研究』のこの巻には、金城の編集意図に賛同した柳田や折口が沖繩研究の論文を寄稿し、後の沖繩研究に多大な影響を与えることになった一冊である。本書にまとめられた論文が書かれた時期は2001年以降であるが、著者の奄美沖繩研究における集大成となる一冊であることが、金城の提言への言及から理解できた。

また本書のサブタイトルは「変容と持続」となっており、火葬と葬墓制をめぐる多様性とさらにはその多様な変容過程を明らかにしつつ、各論文で考察された伝統的要因の持続的様相からは、確かに独立した単位としての奄美沖繩文化の力強さを読み解くことに成功している。

本書では、諸論文は二部に類別され、そのまま各部の章を構成している。各章の目次は以下のとおりであるが、() には各論文の初出年と、初出時の論文タイトルと本書の章題が異なっている場合は、その初出時の論文タイトルも記した。

第1部 火葬の導入と葬送儀礼の外部化

- 第1章 奄美沖繩における火葬の導入と普及過程 (2001 奄美・沖繩における火葬の導入と普及過程)
- 第2章 焼骨と火葬—奄美沖繩における火葬葬法の受容と複葬体系— (2001 焼骨と火葬—南西諸島における火葬葬法の受容と複葬体系—)
- 第3章 葬制の変貌—奄美沖繩における葬儀の変化と規範の変動— (2003)
- 第4章 火葬と沖繩の葬制—火葬の導入による葬儀の再編成とその外部化— (2004)

表紙画像

第2部 沖縄の葬墓制

第5章 沖縄の葬墓制と骨の位置づけ (2004)

第6章 北部沖縄の墓制とその変遷—単葬墓制と木造家型墓— (2005)

第7章 北部沖縄の葬墓制をめぐる若干の問題 (2005)

第8章 沖縄の一人用一次葬墓について—丹葬墓制と木造家型墓— (2007)

附論 共同墓の論理—宮古諸島の改葬墓と本土他府県の埋め墓と—

第1部は、近代以降の奄美沖縄の人々が火葬を取り入れていく過程と、伝統葬法の維持、及びそこに潜む論理を明らかにしている。第1章では、死体の骨化後、第二次葬を実施する複葬体系に与えた火葬の導入と普及に関して考察している。奄美沖縄に火葬が導入されたのは近代以降であるが、そのことは葬送儀礼の外部化をもたらした。著者は儀礼が外部規範をもつ専門家の手に委ねられ、外部規範が卓越していくことを外部化と呼んでいるが、具体的な引用事例は火葬場の設置とその利用の様子である。第二次世界大戦直前には火葬を推進する強力な動きが行政側に生じ、戦後1951年には那覇市による大規模で早急な再火葬による墓地整理が行われ、近い将来の火葬の必然性を人々に認めさせる役割を果たしたという。第2章では、風葬や土葬を基盤としていた奄美沖縄の複葬に火葬が組み込まれると、第二次葬で死骨を焼骨にしたり、焼骨に対して洗骨を行う行為が見られるようになったという。これらは火葬の受容過程で生じたものであり、複葬体系への火葬=単葬体系の導入に対する折衷の試みであると著者は考察している。第3章では、戦後の葬儀の具体的な変化の過程を追うことで、伝統的な葬送儀礼への火葬の組み入れについて、地域による差異や外部施設の利用の広がり等を考察している。第4章では、戦後の火葬の導入時における伝統規範維持のための試みを考察するとともに、外部化の進展を概観する。1953年から1961年にかけて沖縄調査を行ったリーブラによると当時の火葬率は低かったとされているが、著者は既に都市部を先鋒として県全体での火葬率は大きく上昇していたと指摘している。火葬の儀礼手順への組み入れには北部沖縄では2つのやり方が存在しているが、これらはいずれも伝統的な葬送手順の概念化の結果といえ、またその手順の整序が進展した理由は、外部化(葬儀社や僧侶)によるものであると述べている。

第2部では、タイムスパンを第1部より長く設定し、沖縄の葬墓制の変容とその歴史的変遷、伝統的な葬墓制の持続を論じている。瞠目すべきものとしてかつての沖縄の葬墓制にみられた多様性を平敷令治や玉木順彦らの先行研究に導かれて明らかにし、時間の経過とともにその多様性が現在の葬墓制の展開へと結実した様子を論じている。第5章では、沖縄の複葬体系の共同追葬墓で見られた洗骨後の骨の重ね方から、改葬習俗を三類型に整理し、その特性を明らかにするとともに相互の関連を論じている。変容は多様であるが、基底には骨の個性に価値を認めないという観念を示し、さらに共同墓の共同利用のための秩序形成の基盤を提供していることを明らかにしている。第6章では、これまでの沖縄研究が対象としてきた石造墓群とは異なる北部沖縄の森を墓とするもの、木造家型の墓、そして風葬とその変遷について論じ、沖縄の葬墓制の多様性への接近を試みている。本書の表紙にはこの章で言及されている伊波普猷の木造家型墓の図が転載されている。1927年初出の「南島古代の葬儀」に掲載された図で、久志村の山中で土地の老人から聞き書きした内容を作図したものである。伊波は論文の中でこの特異な墓の形を「獵犬などが繁殖するにつれて、其の害を避ける必要上、段々發達して遂にかういふ形を取るに至つたのではあるまいか」と解説している(伊波1974:16-17)。現在沖縄でよく見かける亀甲墓等の石造共同墓ではなく、1850年から60年に存在が推測される木造家型

墓を表紙に示すことで、奄美沖繩のかつての葬墓制の多様性の表現を著者は意図したものと思われる。第7章では、19世紀から20世紀初頭以前の北部沖繩各地で行われていた墓ができる前の死者を吊り下げる第一次葬について、事例を挙げて検討している。現在では特異とも思えるその習俗は、北部沖繩の環境条件的に合理的な技術のなせる技であるとともに、より抽象的・形而上的な要因の関与もあったのではないかとしているが、本論文ではこの点のさらなる考察は行っていない。第8章では、土井卓司の「沖繩久高島の葬送と墓制」における事例を紹介しながら一人用一時葬墓（著者の造語で、死者を葬るためにその場で簡略に作られる1日墓とも呼ばれる墓を意味するという）について考察を試みている。沖繩では葬儀の互助項目の中にその場で作る積石墓や横穴墓、あるいは地面掘込型や岩陰墓といった小墓などの一人用一時葬墓造りが含まれていたという。これら一人用小墓と巨大な共同墓が、沖繩では近代以降併存し、火葬が普及した現在も造営は行われている。その利用は一人用の一次葬墓としての利用が基本ではあるが、火葬用納骨墓として等の柔軟な利用もみられ、にもかかわらず依然としてそれが仮の墓でしかないことから、著者は沖繩の人々における「石造墓に対する希求の強さ」を指摘している（本書：275）。

附論は、第5章で先述した共同墓の論理を、本土他府県における共同墓、両墓制の論理と比較し、琉日双方の16世紀以降の墓制が二重墓制であったことを論述する。まず両者にみられる共通の論理は、死者を速やかに共同墓の利用秩序のもとに置くことであり、そのために死骨への清浄化等の儀礼的認識を完了することで個性を喪失させ、死骨の整理を第三者の手に委ねるとしている。しかし沖繩の中でも洗骨を伴う改葬儀礼では「死者の個別性ないし個性に配慮した、特定の場所や心境が求められる」（本書：287）。つまり、共同墓の論理からは先骨習俗は内発的に導かれるものではなく、外部から導入されたものであるとし、その受容は洗骨までの死者と生者とを関係づける観念を生み出したと述べている。

本書の出版に合わせ、著者が各論文に加筆・修正を加えた箇所の詳細が「あとがき」に記されている。論文発表後に得られた資料や情報、新たに計算しなおされた数値によるためのものがほとんどであるが、1か所の修正加筆から、関連した各章の修正加筆が発生している。著者は先人たちがこれまで積み重ねてきた調査研究資料を本書において検索利用しているが、論文執筆後に改めて閲覧や入手が適った資料を前に、全体の論旨に関わる変更も丁寧に行っていた。櫻井徳太郎の沖繩の靈魂観を考察した『沖繩のシャマニズム』について、「汲めども尽きぬ泉」と著者は別稿で評し、靈魂観の特質が「事例を通して明確に帰納され、仮説として提示されている」と論じていた（加藤 2007: 135）。本書で提示し、検証している仮説も、まさに先人が書き残した事例を通して帰納されたものであり、新たな資料や文献を得ることで、その仮説は常によりの射たものへと展開していく過程がこの「あとがき」からは理解できた。

繰り返しになるが著者は金城の提言を受けて奄美沖繩文化を独立した一つの単位として扱っているが、金城はさらに隣接周辺の諸邦との比較分析を提言していた。附論はその試みの一つとして他府県との比較を行っているが、より広範囲な隣接地域や東北アジア圏の資料との比較研究もぜひ行ってほしい。

評者は医療人類学の立場から沖繩における伝統的民間医療資源、特に動物由来の薬膳や手技の研究をしているが（林 2008）、この分野では琉球文化を一つの独立した単位として扱うことの困難を感じている。現在中国吉林省の農村域の調査を開始しているが、そこでは沖繩での調査事例の源流とも解釈できるような多様な事例を採取しつつある。薬膳や手技は、個人がその効能を経験的に繰り返し生きられるが故に、集団による継承性や共通の文化化はそれほど強

固ではない。一方、本書で扱われている遺骨の処理の仕方や葬墓制は、個人ではなく集団や地域社会がその文化化や継承の単位である。これらの変容や継承は、より広い地理的な文脈や、内在する他の文化項目との関連を織り込んだ分析が必要なかもしれない。

評者の沖縄での医療人類学の調査地は那覇市からフェリーで 2 時間ほどの粟国島であるが、健康の概念は身体と心性における秩序維持やその再構築を背景とするため、同様の背景を持つ葬送儀礼や葬墓制も調査時には常に視野に入れてきた。断崖の凝灰石をくりぬいて作る寄合墓や風葬による一次葬、七夕時の寄合墓を開けての骨化の確認、農閑期の洗骨儀礼、まったくと言っていいほど外部化されていない葬送儀礼の手順などを粟国島では観察することができる。火葬の施設をもたない離島であるとはいえ、評者の調査地の事例が現在の沖縄にとってきわめて貴重な伝統的葬墓制の維持の事例であることを、本書によって再確認することができた。

著者は掲載された諸論文の執筆時期に、沖縄の靈魂観や神観念に関する研究の成果も発表しつづけてきた（加藤 2000, 2003, 2007）。本書は葬送儀礼における手順や制度、あるいは墓制の変容について考察しているが、その背景となった神観念や靈魂観の変容や継続に関してはほとんど言及していない。しかし著者のこれらの別稿からは、奄美沖縄の葬墓制の変容と継続に関する、まさに抽象的、形而上的な要因の関与に関する事例分析が展開すると予想され、著者によるさらなる研究成果の刊行が待たれる所以となっている。

参考文献

伊波普猷

1974 「南島古代の葬制」『民族』2 巻 5 号: 9-38, 民族發行所

加藤正春

2000 「沖縄の『別れ遊び』儀礼の考察—若者仲間による葬宴と死者観念」『民俗学研究』第 65 巻 3 号: 209-232, 日本文化人類学会

2003 「奄美沖縄の葬送・出産儀礼における靈魂の付着と力の作用」『沖縄文化研究』第 29 号: 1-56, 法政大学

2007 「沖縄の靈魂観—靈魂の憑着をめぐる櫻井説の可能性」佐々木公幹（編）『民俗学の地平—櫻井徳太郎の世界—』135-150, 岩田書院

金城朝永

1950a 「沖縄研究史—沖縄研究の人とその業績—」『民族学研究』15-2: 88-100, 財団法人日本民族学協会

1950b 「編集後記」『民族学研究』15-2: 234, 財団法人日本民族学協会

林美枝子

2008 「沖縄における伝統的民俗医療資源の研究—瀉血・吸血に関する考察—」『北海道民族学』第 4 号: 6-30, 北海道民族学会

(はやし・みえこ／札幌国際大学)